



あめ ぶ 雨が降るのは、どうして

くうきちゆう すいじょうき くも 空気中の水蒸気が雲をつくる

うみ みずうみ かわ じめん などから、いつも少しずつ水が蒸発しています。水が蒸発すると水蒸気になって、空気中にふくまれます。

蒸発した水蒸気は、暖められて、だんだんと空高くのぼっていきます。上空は温度が低いので、水蒸気は冷やされて、小さな水や氷のつぶになります。このような水や氷のつぶが、たくさん集まって空にうかび、雲になります。雲をつくっているつぶは、100分の1ミリメートルぐらいの大きさで、たいへん小さいものです。

くも おお 雲のつぶが大きくなる

雲の中で、小さな水や氷のつぶは、くっつきあって、だんだん大きくなります。つぶが大きくなると、重くなって、空にうかんでいることができなくなります。すると、雨になって落ちてきます。雨のつぶは、ふつう、1～2ミリメートルぐらいで、大きいものは、5ミリメートルぐらいあります。

つよ あめ よわ あめ 強い雨と弱い雨

1時間の雨量が、15ミリメートル以上降ったときを、強い雨といいます。雨の降る音がすごく、地面一面に水がたまります。また、1時間に3ミリメートル未満の雨を、弱い雨といいます。この雨は、地面が湿るほどのものです。（監修・村山 貢司）

